

# いち うんが 市と運河と田園風景

**東市と東堀河について** 東市は、平城京内で西市とともに設置された政府直轄の市場です。その位置や区域は、奈良時代の文献などの検討から、左京八条三坊の五・六・十一・十二坪の四坪を占め、全体に正方形であったと推定されています。

東半部の十一・十二坪内では東堀河が南北に貫流します。東堀河は、東三坊間路の東側の各坪内を南北に貫流する人工の河川で、運河として利用されたと考えられています。

**調査の概要** 調査地は、東市の区域の北東部を占める十一坪の北辺西寄りにあたります。

調査地の北側の水田で昭和57年度に実施した第2次調査では、十一坪の北を画する八条条間路と掘立柱の建物や廻の遺構を、昭和58年度に実施した第4次調査では、八条条間路と東堀河の遺構をそれぞれ確認しました。八条条間路は、東堀河と交差する箇所に木橋が架けられていたことがわかりました。東堀河の埋土からは、奈良時代から平安時代前半にかけての土器・木製品・金属製品など多種多様な遺物が出土しました。

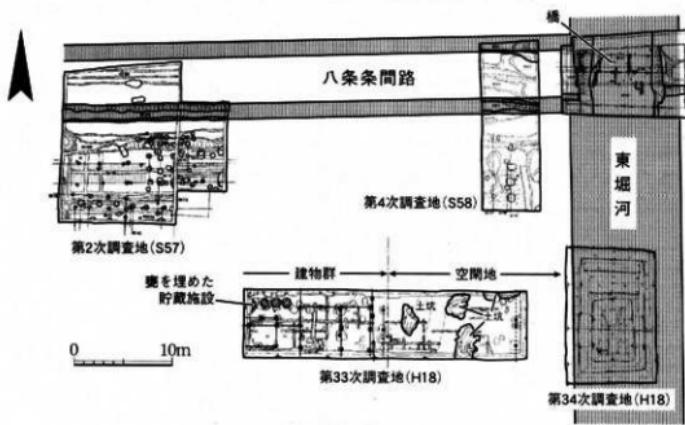
今回の調査は、東西2箇所の発掘区を設定して実施しました。西の第33次調査では、掘立柱の建

平城京東市跡推定地・東堀河跡 納良市東九条町



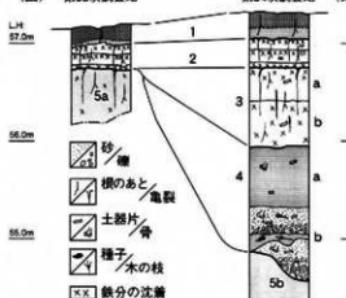
調査地位置図 (1/10000)

物・廻の遺構とゴミ捨て穴らしい土坑を、東第34次調査では、東堀河の遺構を確認しました。建物・廻の遺構は第33次発掘区の西寄りでみられます。発掘区の北西隅で確認した建物は、廻を埋めた貯蔵施設を伴います。これは東市跡推定地内で初見です。建物・廻の分布からは東堀河の西岸に沿う空閑地の存在がうかがえます。東堀河の遺構は深さが約2mで、平安時代前半にはほぼ埋まり、凹んだ沼地になったことがわかりました。東堀河の埋土からは奈良時代～平安時代初頭の土器が多量に出土しました。



発掘区遺構平面図 (1/500)

(西) 第33次調査地

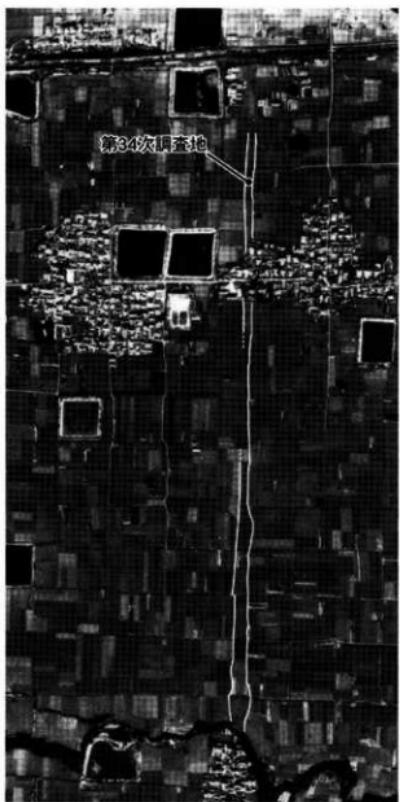


第34次調査地 (東)

## ● 発掘区内の基本的な層序

番号	形成時期	層の性格	層の特徴	主な出土遺物等	備考
1	昭和時代以降	水田作土	黒灰色の泥層	陶器片(少量)、金属のボタン	
2	江戸時代	水田作土	灰色の泥層、上位に鉄分が沈着	江戸時代の陶器片(少量)	3~4層ある。現在と同様の水田耕作か
3 a	室町時代	堆積内埋立土	灰色の泥層、上位に鉄分が沈着	室町時代の土器片(少量)	上面で耕作が行われていた可能性あり
			灰色の泥層、全体に鉄分が沈着	奈良~平安時代の土器片(少量)	上面で耕作が行われていた可能性あり
4 a	平安時代前半頃	東堀河内堆積層	暗灰色の泥層	平安時代前半頃の土器片(やや少量)、ウシカラマの骨	東堀河内が沼地となっていた
			灰色の砂礫層	奈良~平安時代初頭の土器片(多量)、ウシカラマの骨、モモ・ウマの骨	付近の河川と接続し、水が流れ込んでいた
5 a	平安時代後半頃の可能性	池山(上面が奈良時代の遺構面)	黄灰色の泥層		
			青灰色の泥層(少し固い)		
b	約2~3万年前の可能性	池山(東堀河の底面)			

調査地における東堀河の埋土の様相



調査地周辺の東堀河の遺存地割(白線部分)

東堀河の遺存地割 調査地周辺に広がる水田には、東堀河の名残をとどめる地割(遺存地割)が所々でみられます。今回の調査では、この地割が成立する過程がわかりました。

調査地における東堀河の埋土の様相は、上に示す図のようになっています。

奈良時代から平安時代初頭にかけて形成した埋土は砂礫層ですが、平安時代前半頃に形成した埋土は泥層になります。このことから、平安時代初頭までは水が流れていましたが、同前半頃には水が流れなくなり沼地になったことがわかります。

平安時代後半頃から室町時代にかけての埋土は、鉄分の沈着が顕著で、乾燥によって生じた亀裂も見られます。細かな土器片も含まれることから、沼地であった堀河内を埋め立てて耕地が営まれた可能性があります。堀河内は、埋め立てた当初は周囲よりも一段低くなっていましたが、室町時代の終わりには完全に埋まっていたようです。

室町時代の埋土の上には江戸時代の水田床土が被ります。この水田床土は周辺の発掘区でも認められることから、現在の東堀河の遺存地割がみられる水田は、江戸時代の開発によりその原形が成立したと考えます。では、なぜ東堀河を踏襲した地割が残ったのでしょうか。地割は土地の所有や水利と関係するため、変えるのは容易ではありません。堀河内は平安時代後半頃に耕地化するようですが、この当時の土地の所有や水利に関連する慣行が維持されたためかもしれません。